

祖母のお茶

愛知県立横須賀高等学校一年（愛知県）

井上 咲來

私が茶道部に入部したのは祖母の影響だ。私が小さい頃から土日や祝日はよく、祖母がお茶を点ててくれた。小さい頃の私には、お茶を点てる祖母がともかっこよく見えた。そして、お茶と一緒に出てくるお茶菓子も、キラキラと輝いて見えた。

私が祖母の茶筌よりもひとまわり小さな茶筌を持ち、自分専用の茶碗を決め、祖母と一緒にお茶を点てはじめたのはいつだろうか。覚えているのは、祖母の点てたお茶は泡が細かく、私の点てたお茶は泡が大きく、大きさもバラバラだったこと。祖母が点てるのをただ見ているだけの頃と変わらなかったのはお茶菓子。いつ見てもキラキラと輝いていて、この頃には私の楽しみの一つとなっていた。

私が高校生になり、茶道部に入部してからは、だいたいお茶を点てるのは私だけとなった。祖母は隣で私がお茶を点てるのを見ている。そして、私は以前より少しだけ祖母

より身長が高くなっていて、祖母は以前より少しだけ耳が遠くなっていた。

祖母は私にたくさんのお茶のことを教えてくれた。お茶の点て方はもちろん、家にある茶碗についても教えてくれた。「これは飲み口が広いから、夏に適している」だとか、「これは、この中で一番良い茶碗だけど、もらい物だから値段はつけられない」だとか。

祖母には兄弟がいる。家が近いので、たまに行くたびに毎回お茶を点ててくれる。そのお茶は、泡が細かく、見た目は祖母のものと変わらないが、私の知っている味より少しだけ、いや、けっこう苦かった。今になって考えると、祖母は小さい私でも飲めるようにお湯を多めに入れていたのではないだろうか。それが違ったとしても、私の知っているお茶の味は祖母の味だ。これからも、土日や祝日は家でお茶を点てようと思う。祖母のようにお茶を点てられるようにお稽古したい。祖母の味を私が引き継いで、家族にふるまいたい。そして、いつか泡の細かい、やさしい苦さのお茶を今度は私が祖母のために点て、祖母に飲ませてあげたい。